

# 高齢者の社会的孤立と生涯発達 —介護問題を焦点において

坂本源三

日本において高齢者の「社会的孤立」問題が指摘されはじめたのは、1970年代前半のことである。雇用形態の変化と核家族化の進展にもなって、高齢者の単独世帯が増加し、高齢者の孤立が目されるようになった。

今日では、「無縁社会」という報道に代表されるように、「地縁」・「血縁」という「相互扶助システム」の崩壊と、それともなう高齢者の孤立が論点になっている。現象としては、「孤独死」、「介護心中」、「虐待」などである。

また、阪神・淡路大震災において高齢者の孤立が、マスコミ等からも注目を浴びるようになったことは記憶に新しい。

もっとも、何からの孤立なのか、「社会的孤立」といわれる場合、何をもちて社会的というのか今もちて明確ではない。高齢者の社会的孤立問題に関する研究は、大きく社会学的研究と社会政策・社会福祉研究にみられる。

私たちは「社会的孤立」概念の到達点を整理したうえで、まず概念上の定義を措定し、そのうえで以下の5つの論稿を報告していく。

第一に石田論文は、社会的孤立という状態を貧困化という視点から歴史的・動態的に把握する重要性を述べる。同時に、社会的孤立への援助において、人間の特性である生活、生活史を解明していくこと、社会制度としては所得保障から生活保障へと転換していくこと、さらに、潜在能力という人間の持つ可能性に着眼し、援助の具体化を図ること、これらの重要性を明らかにしている。

第二に新井論文は、孤独死に焦点をおきなが

ら、その実態を紹介し、孤独死が発生する要因について考察している。新井氏は次の点を強調している。「孤独死問題の本質は、誰かに看取られたかどうかではなく、また死亡してから発見されるまでの日数でもない。社会的孤立した果ての死こそが問題である」。

第三に渋谷論文は、社会的孤立を、「経済低迷期の資本の蓄積過程での不安定雇用化、家族共同体の崩壊による貧困状態」に焦点をおき分析している。そして、孤立し、支援を拒否する高齢者に対して、生活様式を復元し、本人が主体的に自らの生活へと取り込む過程を総合的に援助するという介護労働の特性を強調している。

第四に鴻上論文は、テンニエスのゲマインシャフト（血縁・地縁の結びつき）からゲゼルシャフト（共通の目的を持った結びつき）に移行していくという視点によりながら、住民主体による今日的な共同体を構築する展望を論述している。

第五に藤本論文は、日本の「ひきこもり」に注目し、社会的孤立を論及していく。とりわけ、著者は今後の対策として、「社会的ひきこもり対応基本法」を制定し、「国が財政的支援の責務を持つ」ことによって「ゆっくりひきこもりつつ、スポーツ、文化を楽しみ、就労してもいい」日本の社会を展望する。

以上が、本特集論文の概要であるが、日本の介護福祉研究において社会的孤立に焦点をおいた研究は少なく課題は多い。今後引き続き研鑽を深めていく。

（さかもと・げんぞう：JSA 高齢者・障害者の  
人権保障研究委員会）